

人生を拓く

36

江添好松さん 21町内会

父島津要三郎さん(50代で逝去、没年不詳)、母カメさん(59歳で逝去、没年不詳)、長兄の一家3人で九州・大分県から明治20年代後半ごろに江部乙兵村(現滝川市江部乙地区)に開拓入植したようです。好松さんは4男2女の三男として育ち、江部乙村立北辰尋常高等小学校を卒業しました。主席だったそうです。

両親は大正時代になってようやく栽培が本格化し始めた水田(7畝)を中心として稲作と豆類(2・5畝)を栽培。高等小学校を卒業後、15歳で家業を手伝い始めました。

1943(昭和18)年、21歳で召集を受けてビルマ戦線(現ミャンマー)へ。「マラリヤがひどくてなあ。部隊の半分以上がやられた。オレも飛行場部隊に配属されて半年で入院したよ。後方部隊だったから助かったけど、帰るまで入院して丈夫になれんで復員した」。

1945(昭和20)年、終戦の年すぐに復員することが出来ました。その年、旧樺太から引き揚げて男手がなかった江添家に養子縁組み。1歳年上のハルさん(平成20年、84歳で逝去)



と結婚し2男4女を育てました。「帰ってきてからもマラリヤの症状あつたけれど、2年ほどで出なくなつたよ。それでも無理すればすぐに41度まで熱が出て頭痛くなって寒気がして困つたもんだつたよ」。

「来てみたら石ひどくてさ。始末に何年もかかったね。全部で石の山が100以上も出来た。それを暗きよに使つて基盤整備できたからよかつたよ。基盤整備ほどありがたかつたことなかつたな。石片つけて田んぼがいっぱんに3反も4反も増えたり、反当7俵くらいしか取れんかつたところ、10俵近くとれるようになったな」(1反は10ア、1俵は60kg)。米作り名人の称号は持つていないものの、優良米生産農家として表彰もされました。

戦時中に患つたマラリヤ以外は健康で、ハルさんが元気なころは連れ立って日本各地を巡りまわした。90歳から好きだった飲酒と喫煙も控えるように。「若いころ一緒に遊んだ飲み友達がみんないなくなつてさ」と健康を気遣っています。

俳句

ものの芽が地上の様子覗いてる
樹幹いま春の小川の音がする
ものの芽のエルムの道に通じてた
どこだどこだ子等が見上げる揚雲雀
近づけば母の匂ひのふきのとう
雪解風三つ続けて祝事
おばあちゃん春田の地上絵見えますか
ものの芽に色を配りて通り雨
ものの芽やポップコーンの音がする
クロッカス話上手で聞き上手
空き缶の下に花の芽ヘルプミー
泥いっぱいの春の遺伝子嗅ぐ子かな
植え替えた花の芽につこり顔を出し
クロッカス陽を浴びて行く登校児
風の中ノラの足元ふきのとう

山内みゆ
小林ろば
杉山ひろのり
保科なほ
徳光吐苦
杉山りつ
こばやし 星来
横田則子
高瀬潤
石澤清宏
三島智
若田郁
本田咲
佐々木りえ
斎藤順子

